

# 漢川善書における宣講形式の変容

## 一 はじめに

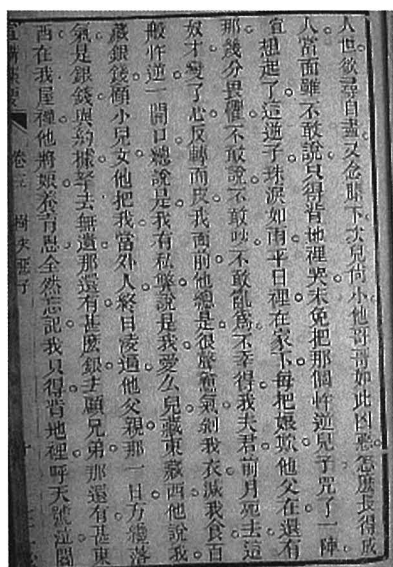
湖北省の漢川市周辺に伝承する「漢川善書」は、説書に似た講説と演劇に似た歌唱をまじえて聴衆に善行を勧める文芸である。こうした文体は聴衆への説得力を考慮して生まれた。

漢川善書の源流は聖諭宣講である。清朝は順治帝の「聖諭六訓」と康熙帝の「聖諭十六条」を全国に頒布してその宣講を義務づけた。しかし教条だけを宣講したのでは民衆が興味を示さず、清末に至ると「案証」と称する勧善懲悪の事例を引くことが慣例となった。咸豐二年（一八五二）に編集された『宣講集要』十五巻によれば、その文体は文字を知らない民衆が聴いてわかる方言（西南官話）を用い、人物は主として十言句（七言句などもある）から成る長編の歌詞を綿々と唱い、天地を感動させて悪人に懲罰を加えさせるという因果応報を説くものが多い。人物の歌唱を重視するのは、『詩経』『国風』以来の詩歌の思想を継承するものであり、詩歌は心の声であり、心の証と考えられるからである。

漢川市でおこなわれる漢川善書は、基本的に清末の宣講の伝統を継

承しているが、さらにそれを発展させ、人物が二人で応酬する「対詞」と「回詞」を設定している。もともと宣講は一人で講説と歌唱を同時に担当することもできるが、この形式は少なくとも二人以上でなければおこなえないのである。現在漢川市では、男女五名が一グループを結成し、二人ずつが組を作っている。これによって宣講は演劇と似たおもしろさを表現することができ、聴衆を魅了しているのである。本稿ではこうした伝統的な宣講形式の変容について考察してみたい。

## 阿部泰記



『宣講集要』（咸豐二年刊本）

## 二 民間宣講の形式

『宣講集要』に掲載する案証には、対詞の場面は多くない。ただ「宣講」の概念については「宣」は歌唱、「講」は講説という認識を示している。たとえば「大舜耕田」(『宣講集要』卷二)では、舜が異母弟と父母にだまされながらも彼らを慰める言葉を「宣」と称し、その後によく講説を「講」と称して区別している。

宣這一交 跌下来 昏倒一陣、猶幸得 平地 身子不痛。(八句省略) 講他父母説、那們個火把你嚇倒了麼。(宣「ばつたりと」転んで 昏倒したけれど、幸いに 平地に降り 身体は痛まず。……) 講彼の父母は申します、「どんな火がおまえを驚かせたのかい。」

ただこの場合、一人の宣講師が「宣」も「講」も同時に担当することができたであろう。この後にも、舜がいくら努力しても父母を喜ばせることができないので自責の念に駆られて天に向かって号泣する場面、帝位についても孝心を尽くす舜を見て父と弟が悔悟してそれぞれ心情を吐露する場面に「宣」を用いているが、必ずしも複数の宣講師を必要とするわけではない。

実際、宣講師は複数の人物の歌詞を一人で担当したと思われる。それは案証の中には、以下の「姜詩躍鯉」(卷二)のように、歌唱する人物の名前を先に出して唱う場面が見られるからである。

姑怪問隣母曰、「這一向 承你情 百般奉送、想我身 並無有 半点之功。(二句省略) 有隣母 聽此言 即便説道、非是我 送 飲食 這樣蹊蹺。(八句省略) 有姜母 聽此言 又驚又訝、万不

料 我媳婦 尚在隣家。(七句省略)」(姑は不思議に思つて隣家の婦人に尋ねて申します、「これまで厚情を受け 贈答は数知れず、わたしには 身に覚え いささかもなし。……隣家の婦 それを聞き すぐに答えて、飲食を 送るなど おかしな話。…… 姜詩の母 これを聞き びっくり仰天、はからずも わが嫁が 隣家にいるとは。……)」

こうした異なる人物の歌唱を一人の語り手が担当することは、早くは古楽府の中に出現する。たとえば「陌上桑」(『樂府詩集』卷二十八「相和歌辞」)には、羅敷の美貌に惹かれた趙王が使者に子細を問わせ、自ら羅敷の意向を打診する場面で、次のように唱う。

使君遣吏往、問是誰家姝。「秦氏有好女、自名為羅敷。」「羅敷年幾何？」「二十尚不足、十五頗有余。」使君謝羅敷、「寧可共載不？」羅敷前置辭、「使君一何愚。使君自有婦、羅敷自有夫。」(君主は役人派遣して、どこの美女かを尋ねます。「秦家に美貌の娘あり、その名を羅敷と申します。」「羅敷の年はいくつかな。」「二十にはまだ足らず、十五には余りあります。」「君主は羅敷に挨拶し、「一緒に車に乗らないか？」羅敷は進んで辞退して、「王様なんと愚かでしょう。王には妻がすでにあり、羅敷にも夫がおります。」「こうした語り物の歴史から推察するに、善書の宣講師もこの古楽府の語り手と同じように、やや声色を変えて複数の人物の言葉を表現したものと考えられる。

そして古楽府と同じように、講説であるべき部分を歌唱で表現する

案証も見られる。たとえば「孝避火災」(『宣講集要』卷二)では、次のように冒頭に「宣」を置いて語り始める。

「男婦們 休得要 鬧鬧嚷嚷、我今日 說一個 孝順兒郎。(六句省略)」這張老三、雖然是個抬轎子的人、却有一點孝心。……

即便對母親說道、「請老母 來吃飯 坐在席上、漫漫吃 兒今日

又要下鄉。(八句省略) 辭了母 打轎子 就把路上、抬至在

湯家坪 餓得心荒。……」(「皆の衆 しばらくは 騒いでならぬ、

本日の お話は 孝行息子。……」この張老三は轎担ぎをしてお

りませんが、孝行な心を持っておりました。……すぐに母親に向かっ

て言うには、「お母さん 食事だよ お座りなさい、ゆつくりお

食べ 僕はまた 田舎に出かける。……」別れ告げ 轎を担いで

出発し、湯家坪に 至る頃に 腹が萎えた。……)

このように、案証では人物の言葉だけではなくその行動までも「宣」によつて表現することがあり、それは伝統的な語り物の形式でもあつて、多くの案証の宣講は、一人の宣講師が担当していることがわかるのである。

しかしながら『宣講集要』の案証においても、複数の宣講師の存在が考えられるものがある。それは人物の「宣」の途中で挿入される別の人物の言葉である。たとえば「嫌媳悪報」(『宣講集要』卷五)では、嫁ぎ先に帰ることを恐れる娘の「宣」の途中に父親の言葉を挿入する。

聽一言 歸家去 心驚胆戰、這一回 料想是 不得生還。

兒哪、你只回去、耐煩過些日子、有為父的存在、你婆婆就難纏你、說些不敬的

我婆婆 心狠毒 難以改變、豈能容 兒

一時 不受熬煎。兒哪、你婆婆若再這樣纏磨、(帰れとの 一言聴いて 震え  
は止まらず、今度こそ おそらくは 生きては帰れず。

娘よ、安心して帰りを、しばらくは我慢しなさい。私が家にいるからには、姑どのおまえをいじめようとしても、簡単にはできません。 姑の 悪辣さ 改めがたく、

ひとときも いじめられぬ ことなどありえず。娘よ、姑どのがもしまたいじめたならば、私は決して許さないぞ。

ここは、姑の虐待に対する娘の恐怖心を理解できない父親の樂觀的な心境描写を挿入して、娘の悲惨な境遇を強調する場面であり、「宣」

を担当する者が歌唱の途中で、父親の科白を同時に担当することもでき

ないことはなからうが、かなり困難を伴うであろう。

また二人の人物が交互に唱う「宣」もある。たとえば「割耳完貞」

(『宣講集要』卷四)では、不良に絡まれた嫁が貞節を守るため美貌を

傷つける場面で、姑と嫁が言葉のやりとりを行う。

母媳婦今日為何焉、両耳不成血染衫。媳可恨浪子真狗胆、忽然立

站我身辺。母低頭莫把他人看、各自歸家把門闔。媳一時媳將容顏

變、割去兩耳丟面前。(母あなた今日はどうしたの、両耳なくして

血だらけよ。嫁にくい不良が悪巧み、突然そばに立ちました。

母顔を伏せて相手見ず、帰宅をしたら鍵かけて。嫁私は顔色すぐ

変えて、両耳そいで投げました。)

穩健な姑の問いかけに答えて、嫁は烈女の気性を表出しており、一人の宣講師が声色を使い分けるのは無理がある。

上記の二例に見えるように、『宣講集要』には科白や歌詞において脇役の人物を演じる宣講師の必要性をうかがわせる案証が存在する。そして脇役の存在は主人公の苦衷を表現する補助をしている。

## 二 伝統形式の継承

清末における案証の宣講は、一人あるいは二人という少人数によって行われていた。この形式は現在でも仙桃市で行われる漢川善書に継承されている。

たとえば「法堂換子」（仙桃市・杜子甫）は、実子を犠牲にして継子を庇護する理想的な継母像を描いた案証で、以下のように「宣」の場面を設定している。

① 秦潤夫が臨終にあつて、後妻の柴氏に対して、前妻の子富元を託す。

② 柴氏が実子貴元に対して、母のいないかわいそうな富元を保護する必要を説く。

③ 富豪張福に陥れられた富元が県令に対して冤罪を訴えるが、拷問に屈する。

④ 柴氏が獄中に富元を見舞つて悲しむ。

⑤ 柴氏が貴元に対して、富元の身代わりとなるよう説得する。

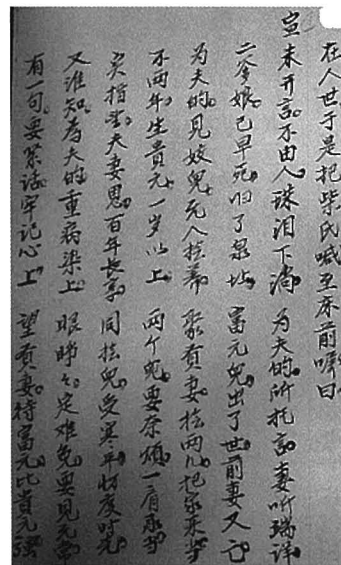
⑥ 貴元が県令に対して、自分が富元であると訴える。

⑦ 富元が貴元に対して、馬鹿なことはやめるよう説得する。これを聞いて柴氏が富元に対して、前妻の子をかばうのはやめるよう説得する。

⑧ 富元が柴氏に対して、弟を失いたくないと訴える。柴氏が富元

に対して、父の遺言を守らなければならないと説く。

⑨ 張福が県令に対して、富元を誣告した罪を認める。



「法堂換子」（杜子甫抄本）

この案証は、古くは任燮亭採輯『閨閣十二段錦』（光緒九年（一八八三））第五段「法堂換子」として収録されているが、①③④⑦⑨の場面が無く、現代では「宣」の場面を増加して、①のような老父が臨終に残された家族を心配する場面、③のような自分の悲惨な境遇に苦しむ場面、④のような母が子を思って悲しむ場面、⑦兄弟や親子がお互いにかばい合う場面、⑨悪人が罪を認めて懺悔する場面など、様々な場面で人物が歌唱によって心情を表現するようになったことがわかる。

しかしながら原作にもすでに、現代のテキストにおける⑦⑧のような母と子の歌唱の応酬が見られ、現代のテキストの⑤の場面では、柴氏だけではなく貴元も「宣」で応じている。

宣叫一声 我的兒 把我話聽、說出来 你莫又 怪我狠心。（六句省略）貴元一聽就向母親哭說、宣母親話 說出来 兒曉得聽、

是想児 替哥哥 受這死刑。(四句省略) 母又哭、宣聽兒言 不由我 咽喉多哽、到底是 我的兒 曉得真情。(十二句省略)

「ああおまえ 我が息子 話をお聴き、話しても 絶対に むごいと言いな。……」 貴元は聴いて母に向かって泣いて言います、

「母さんの お話は よくわかりましたよ、私に 兄さんのため 死刑を受けよと。……」母はまた泣いて、「子の言に 我知ら

ず のどがむせぶ、さすがです 我が息子 よくわけを知る。……」

このような「宣」の応酬は、よく感情の交流を表現することができ、物語のクライマックスを作り出して聴衆を感動させるのであり、少なくとも二人の宣講師を必要としたであろう。

筆者は二〇〇四年九月に仙桃市の老人クラブを訪問した際に、杜子甫(七十七歳)・鍾立炎(七十二歳)・尹業謨(六十八歳)・王宗発(七十歳)による「父子双合印」の上演を見たが、一人が一定の時間、「宣」と「講」を担当する方式を採用しており、時間が来ると交代していた。上記のように二人の人物の「宣」の応酬が無い限りは、伝統的にこのような方式で宣講は行われてきたのであろう。ちなみに「父子双合印」(一九九九、鍾立炎)の「宣」の場面は以下のごとく多いが、二人の人物が応酬する場面はない。

①母康氏が、巡按として南京に赴任する秦国保と妻李秀英に対して忠告を与える。

②盗賊に遭って川に身投げした秦国保が、命を救った漁民に対して事情を語る。

③盗賊鄂成虎にとらえられた李秀英が、五霸山の土牢の中で痛哭する。

④高雄に救われた李秀英が、白雲庵に逃れて尼僧に事情を訴える。

⑤白雲庵で出産した李秀英が、嬰兒に血書と白羅衫をつけて捨てる。

⑥康氏が、相次ぐ家の不幸を悲しむ。

⑦鄂成虎に殺された秦国正の靈魂が、康氏の夢に現れて復讐を求め。

⑧高雄が、南京巡按になった鄂天保(実は秦国保の子)に実情を語る。

⑨秦国保が、巡按府の東部屋で白羅衫を見て痛哭する。

⑩李秀英が、巡按府の西部屋で血書を見て泣き出す。



「父子双合印」の上演場面  
(筆者撮影、2004.9.8)

漢川市の宣講も、テキストから推察すると、初期の頃は人物が「宣」を応酬する場面は少なく、一人の宣講師が「宣」も「講」も同時に担

当していたようである。たとえば「茶碗記」（一九八二年、孫大和転抄、黄梅戯改編）は、以下のような「無頭公案」である。

十六歳で父母を亡くした王錦春は教師をして生活をする。茶店の娘張秀英は彼に好意を抱き、密会の手紙を茶碗の下に置くが、それを肉屋周大成が見つけて錦春に扮して秀英に会う。周は秀英に抱きつくが、秀英に押し倒され、騒音に驚いて駆けつけた父親の頭を切り取って逃げる。秀英の兄広清は江都県に、妹が姦夫と共謀して父を殺したと訴える。秀英は拷問に屈して錦春が犯人だと自供する。錦春も拷問に屈して姦淫と殺人を自供する。周は生首を汪豊成の家に投げ込む。汪は楊大有に銀三十両を与えて棄てさせる。楊は子供に見つかったため、子供を水に落として去る。錦春は牢番馬仁に銀二十両を与えて生首を捜させ、馬仁は病死した叔父慶順の墓を暴いてその首を奪う。慶順の妻李氏はこれを知って県に訴える。県令は錦春を疑い、錦春は馬仁の仕業だと自供する。県令が秀英を尋問すると、男の胸は毛深かったと言う。十日以内に犯人の捕縛を命令された役人が城隍廟に祈ると、夢に啓示を得て周を捕らえる。周は罪を自供し、芋蔓式に汪豊成・楊大有も罪を自供する。

この作品では以下のように十場の「宣」を設けているが、いずれも単独の「宣」である。

- ①王文年夫婦対子詞・錦春哭父母屍詞 ②張広清上堂 ③張秀英上堂 ④王錦春上堂 ⑤李氏上堂喊冤 ⑥馬仁上堂 ⑦差人到廟

焼香 ⑧周天成上堂 ⑨汪豊成上堂 ⑩楊大有上堂

また伝統善書を講じた作品にも単独の「宣」が多い。たとえば「捨命伸冤」（袁大昌）は、「宣講摘要」「宣講大全」にも収録される、妻が命がけで冤罪の夫を救う夫婦愛を描いた伝統善書であり、「宣」の応酬は④場にしか見られない。

- ①劉金鳳夫妻哭屍合詞 ②劉金鳳上堂 ③劉合金上堂 ④劉合金對妻／回詞 ⑤梅氏對祝長青伯伯 ⑥劉合金見督府大人 ⑦道情詞 ⑧朱緑紅上堂

### 三 伝統形式の変容

だが漢川市の宣講は後に回詞を増加させていく。今、八〇年代の作品と袁大昌がそれ以後に改編した作品を比較してみると、以下のような相違が見られる。

たとえば「趕春桃」（一九八三、羅文彬抄録、漢劇『大合銀牌』改編）は、以下のように「宣」十場を設定するが、「宣」の応酬は二場である。これに対して「状元尋母」（一名「大合銀牌」、袁大昌）は「宣」九場をもうけ、「宣」の応酬を三場増やしている。

「趕春桃」 (羅文彬)	「状元尋母」 (袁大昌)
① 李春桃对韓宏道詞 ② 春桃磨坊自嘆 ③ 嚴氏追趕春桃罵詞 ④ 李春桃在路傍对員外詞・韓宏道詞 ⑤ 李春桃对王三久詞 ⑥ 李春桃对尼僧詞 ⑦ 張氏罵嚴氏詞 ⑧ 嚴氏对丈夫詞 ⑨ 韓宏道上堂詞・吳光宗・王三六上堂 ⑩ 韓宜春焚香詞・李春桃道詞	① 李春桃对員外 ② 李春桃对員外/回詞 ③ 嚴氏罵春桃/回詞 ④ 春桃对夫/回詞 ⑤ 李春桃对大伯 ⑥ 張氏罵嚴氏/接出韓員外答詞 ⑦ 王三六对員外 ⑧ 吳登銀上堂・接出王三六上堂 ⑨ 認子・韓宜春焚香/回詞

② 「趕春桃」では、妾春桃は一人で嫉妬深い正妻嚴氏の仕打ちに苦しむ。「状元尋母」では、夫韓宏道が出現して春桃に我慢して生き抜くよう励ます「宣」を入れる。

③ 「趕春桃」では、正妻嚴氏の残酷な言葉に対して春桃は一句ごとに口を挟んで抵抗する。「状元尋母」では、別に春桃が韓家の後継のことを考えるよう嚴氏に反省を促す「宣」を加える。

⑥ 「趕春桃」⑦では、わがままな養子を打った嚴氏に対して、実母である張氏が罵詈雑言を浴びせる。「状元尋母」では、張氏に対して嚴氏の夫が非難をする。

また「五子争父」でも、一九八二年の羅文彬の作品では「宣」七場を設定しているが「宣」の応酬場面は見られず、その後には作られた袁大昌のテキストでは、四場の「宣」の応酬場面を設けている。

「五子争父」 (羅文彬)	「五子争父」 (袁大昌)
① 李氏对夫詞 (哀詞) ② 鳳山对二青年詞 (哀詞) ③ 公子对老漢詞 (哀詞) ④ 唱勸世文詞 (樂詞) ⑤ 父子会・弟兄对父詞 (合詞) ⑥ 許大慶・許小慶上堂詞 (哀詞) ⑦ 鍾孝・鍾悌二弟兄上堂詞 (樂詞)	① 李氏得病对夫/回詞 ② 細哥向母求情 ③ 許鳳山破廟自嘆 ④ 許鳳山对年輕人 ⑤ 徐懷建对老伯/許鳳山回詞 ⑥ 唱道情 ⑦ 大慶对父親/回詞 ⑧ 許大慶具狀・接出鍾孝上堂 ⑨ 許鳳山見巡按大人/巡按回詞

① 許鳳山の妻李氏が不孝な息子夫婦に悲観して病死する場面であり、袁本では妻にすぐ後を追から行くからと慰める許鳳山の「宣」を加える。

⑤ 金を落とした若者徐懷建が鳳山に救われて礼を述べる場面であり、袁本では二青年が拾った金を贈ったものであり、無事に上京して科挙に合格するよう激励する鳳山の「宣」を加える。

⑦ 不孝な息子大慶・小慶が父に金が贈られたことを知って父を迎える場面であり、袁本では非情な息子を息子と認めない決意を述べる鳳山の「宣」を加える。

⑨ 鳳山が召喚されて大慶・小慶の非情な行為を述べる場面であり、鳳山が恩人であることを知った巡按の懷建が鳳山を父として認めて養うことを述べる「宣」を加えている。

そして袁大昌の作品ではほとんど毎場面に「宣」の応酬を設定して

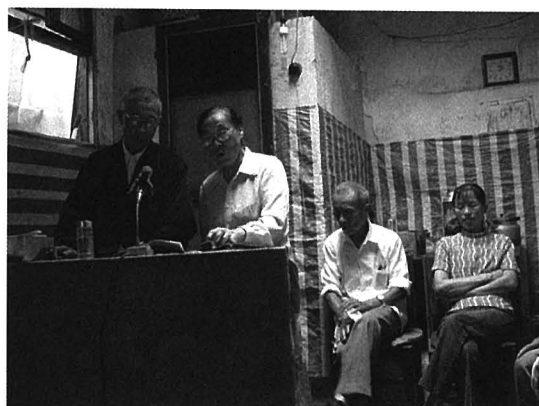
<p>「血羅衫」</p> <p>①草堂訓妹／回詞 ②母子餞行／回詞 ③見血衫李氏哭兒 ④月英辭婆／回詞 ⑤土牢結義／回詞 ⑥裴月英見馬員外／回詞 ⑦假裴宣洞房對小姐 ⑧慶功勞月英見元帥／回詞</p>	<p>「審煙槍」</p> <p>①王明山訓子／天喜回詞 ②劉氏訓女／貞秀還詞 ③明山夫婦合詞哭屍 ④王明山告狀 ⑤李貞秀上堂 ⑥探監：貞秀對母／還詞 ⑦李貞秀上堂 ⑧伍氏對媳婦／貞秀還詞</p>	<p>「孝子得妻」(鷄換妻)</p> <p>①周元對客人／回詞 ②梅香丫環對周元／回詞 ③黃氏對子／回詞 ④張氏對女／回詞、春香對夫人 ⑤吳玉英自嘆 ⑥吳氏玉英對黃氏／回詞 ⑦鄧世祥上堂見巡按 ⑧母女會：玉英對母／回詞 ⑨洞房叙情：周元對小姐／回詞</p>
<p>「三宝記」</p> <p>①郭氏對子／回詞 ②李志貞對大王 ③李志貞自嘆 ④志貞見女大王／回詞 ⑤饒行秀英對夫／回詞 ⑥郭氏對小姐／回詞 ⑦吳秀英具狀·王孝上堂 ⑧王篤珍宣詞／包公回詞 ⑨李志貞對妻／回詞</p>	<p>「血手印」</p> <p>①昭德對母／回詞 ②林昭德對小姐／回詞 ③林昭德上堂 ④探監：昭德對母／回詞 ⑤王千金修血書 ⑥王千金對相公／回詞 ⑦王千金見包公 ⑧薛培三上堂 ⑨薛超上堂／回詞</p>	<p>「孝遇良緣」(神虎媒)</p> <p>①沈氏對子／回詞 ②石正文對小姐／回詞 ③趙氏對女／回詞 ④乞巧對老嫂／回詞 ⑤饒行：正文對妻／回詞 ⑥逼婚：馬彬對美人／玉梅回詞 ⑦探監：玉梅對母／回詞 ⑧玉梅上堂 ⑨陳玉梅對夫／回詞</p>
<p>「鳳落梧桐」</p> <p>①吳氏對子／回詞 ②金鳳對相公／回詞 ③金鳳對父親／回詞 ④張金鳳自嘆 ⑤張金鳳對大嫂／回詞 ⑥雪梅對金鳳托孤／回詞 ⑦假雪梅對吳氏／回詞 ⑧雪梅對表弟／回詞 ⑨張金鳳對吳桐／回詞</p>	<p>「比武招親」</p> <p>①曹世昌對女／曹青和回詞 ②龍少川對小姐／曹青和回詞 ③曹世昌見皇上 ④探天牢：老爺對夫人 ⑤魯殷郎對曹青和／回詞 ⑥曹青和自嘆 ⑦曹青和上堂 ⑧鄒府會：青和對步州／回詞 ⑨母女會：青和對孟氏／回詞</p>	<p>「冤中冤」</p> <p>①王春蘭對臙脂／回詞 ②宿介對鄂秋隼／回詞 ③宿介對表妹／回詞 ④臙脂哭屍 ⑤臙脂上堂 ⑥秋隼上堂 ⑦母子監牢會 ⑧臙脂上堂 ⑨秋隼上堂 ⑩母子監牢會／回詞</p>

<p>「尼俗姻緣」</p> <p>①莊氏與子餞行／回詞 ②陳翠雲自嘆 ③潘公子對尼姑／回詞 ④莊氏對子／回詞 ⑤學深對母親／回詞 ⑥尼姑對莊夫人 ⑦學深對母親／回詞 ⑧翠雲對舅母 ⑨翠雲對莊夫人 ⑩學深對娘子／回詞</p>	<p>「五命奇冤」(劍趙王)</p> <p>①潘惠湘見趙王 ②黑房會：惠湘對夫／回詞 ③申德對主人文忠報凶信 ④畢文忠上堂具狀 ⑤姜襄雲與院公餞行／回詞 ⑥申德訴狀 ⑦徐玉双双自嘆 ⑧玉双双對店媽／回詞 ⑨徐玉双双具狀 ⑩趙王上堂／包公回詞</p>	<p>「梅花」</p> <p>①羅氏對妹／回詞 ②羅氏與夫餞行／回詞 ③德康對妹丈 ④羅氏對妹／形雲回詞 ⑤羅惠英上堂 ⑥形雲探監對羅惠英嫂／回詞 ⑦形雲復詞請罪 ⑧形雲勸酒審夫／鼠生回詞 ⑨形雲上堂 ⑩桑鼠生上堂</p>
<p>「魚網媒」(得意忘情)</p> <p>①落水女子對大伯 ②崔通對妹妹蘭英／回詞 ③文遠與侄饒行／回詞 ④十里相送夫妻合詞 ⑤文遠對蘭英／回詞 ⑥張蘭英對夫／回詞 ⑦蘭英擗刀求饒 ⑧蘭英涼亭自嘆 ⑨張蘭英見巡按／回詞 ⑩崔通上堂</p>	<p>「鳳凰山」</p> <p>①張水情病中對妻／回詞 ②(不明) ③小趙王對漁女／回詞 ④趙王屬子／回詞 ⑤史賢君自語／新娘子自思 賢君復詞／秋鳳復詞 ⑥漁女對母親梁氏／梁氏回詞、接着救濟 ⑦漁女對秀雲／回詞 ⑧秋鳳屬子 ⑨秀雲對母親說笑 ⑩愛寶對母親</p>	<p>「双秋配」</p> <p>①白太玄病中對妻／趙氏回詞 ②雪雁對雪蓮 ③米一秋洞房自思 ④守成對守信／秦守信回詞 ⑤雪蓮對老爺 ⑥戴瑛對米都督 ⑦艷秋對母親／趙氏對女回詞 ⑧小房定計：艷秋對守信／回詞 ⑨周氏喊冤 ⑩周氏攔轎告狀</p>
<p>①文遠法場罵侄·蘭英回詞 ②崔通對蘭英／回詞</p>	<p>①秋鳳屬子 ②狀元對小姐／回詞 ③張漁女哭墳 ④張漁女對秋鳳／秋鳳回詞 ⑤漁女復詞／回詞 ⑥秋鳳屬子 ⑦慧貞對夫／回詞</p>	<p>①米懿秋見大人 ②丁守成對漁翁／李麻清回詞 ③守成對雪蓮／雪蓮回詞 ④守成對守信／守信回詞 ⑤丁守成對米仲清 ⑥洞房聯詞：艷秋起詞／一秋回詞 ⑦艷秋復宣詞／一秋再宣 ⑧秋宣、一秋吐實情／艷秋回詞 ⑨代瑛對都堂 ⑩守成對一秋／一秋對夫回詞、接出白艷秋對母／趙氏對女回詞 ⑪米仲清對丁守成／丁守成回詞 ⑫姚氏上堂</p>



これらの作品を総合すると、各作品は平均して九場以上の「宣」を持つ。いま筆者が漢川市で見た善書の上演は「宣」を熊紹軒・聶海子・黄春桃・祁敏新の四名が分担しており、その分担の様子は以下のようであった。

<p>「売子奉親」(徐忠徳) 二〇〇四・九・二</p> <p>講……徐忠徳</p> <p>①周子善与子饒行/文俊回詞……熊・聶 ②梁惠英送夫/文俊回詞……祁・聶 ③婆呉氏得病对媳/惠英回詞……黄・祁 ④文俊对妻張愛嬌/愛嬌回詞……熊・黄 ⑤秃子: 惠英对子/妙郎回詞……祁・黄 ⑥惠英对府大人……黄 ⑦子善罵媳/惠英回詞/子善復詞……熊・祁 ⑧方天官对義子/妙郎回詞……熊・聶 ⑨母子会: 妙郎对母/回詞……黄・祁</p>	<p>「劉子英打虎」下集(徐忠徳) 二〇〇四・九・五</p> <p>講……徐忠徳</p> <p>⑨陳洪員外对劉子英/子英還詞……熊・聶 ⑩牛青对假小姐/謝蘭香還詞……熊・黄 ⑪牛青对夫人……聶 ⑫婁月英求情……祁 ⑬夫人对好漢/子英還詞……黄・聶 ⑭周勝清与許嬌春饒行/嬌春還詞……熊・祁 ⑮弟兄山中会/子英還詞……聶・熊 ⑯母子会/嬌春還詞……黄・祁 ⑰兄妹会: 合詞……熊・祁</p>
---	--



「劉子英打虎」を演じる熊紹軒氏(左)と黄春桃氏(右)。後方は徐忠徳氏(左)と祁敏新(右)氏。(筆者撮影、2004.9.5)

#### 四 結び

聖諭宣講は民衆への浸透を図るために、清代末期に至って講説に歌唱を交えた方式を取るようになった。現代の漢川市や仙桃市に伝わる「漢川善書」はその方式を継承しているが、民衆を引きつけるためにさらに娯楽性を加え、題材を戯曲・小説に求めるとともに、物語に出現する人物が歌唱する「宣」の場面を増やした。漢川市ではさらに「宣」の中でほかの人物が口を挟む形式をほかの人物が独自に「宣」の形式で応酬する形態に変容させた。歌唱形式は人物の心情を如実に描写することができ、「宣」の応酬形式を取ることによって、ドラマのように家族や人物と人物の関係を強調したり、クライマックスを形成したりして物語に立体感を表すことができたのである。そのために漢川市で活動する宣講師は五名でグループを形成している。その上演時間もストーリーによって四時間の長きに及び、「劉子英打虎」のように上下二回に分け二日にわたって上演する場合もある。そして書館と称する演芸場において毎日公演しており、その作品の数たるや膨大であり、本稿で紹介した作品はほんの一部分に過ぎない。そして現在も継続的に創作が進められており、この地方に居住する老人のよい娯楽となっている。こうした漢川市における善書の新しい様式は、現代において善書が生き残る道を模索した努力の成果だといえよう。ただ作品の中には娯楽性にとらわれて教育性の希薄な作品も含まれている。

善書は本来民衆を教化することを目標とする文芸であり、本源を忘れてはならないであろう。